

I-1

フィンランドにおける言語史—フィンランド語はフィンランドで生まれた

現在「フィンランド」と呼ばれている地域における言語史については、その考え方が 2000 年代に大きく変化したそうです。そこで、ここでは Jaakko Häkkinen さんが 2014 年 8 月 8 日に発表した論文の重要部分を抜粋しながら、先史時代のフィンランドにおける言語状況を見ていくことにします（論文はインターネットで入手できると思います）。ただし、Häkkinen さん自身が論文の冒頭で書いていることですが、将来における研究の成果がこの論文で描かれる内容に変更を迫る可能性は十分にあります。

それでは、学術論文でもあり難しいと思いますが、何かしら学べればよいということで満足してください。まずは論文のタイトルから始めましょう。なお、テキストの日本語訳の中で私が加える注や補足はくゝの中に入れておきます。また参考文献を示す原注は各テキストの最後に記載してあります。

【1】読んでいく論文のタイトルを確認

”Kielet Suomessa kautta aikain”

■ 語句・文法

aikain は aika の複数第 2 属格 (monikon toinen genetiivi) の形です (ふつうの複数属格は aikojen となります)。複数第 2 属格形は複合語の第一要素として登場したり (たとえば、**vanhain**koti「老人ホーム」、**pyhäin**päivä「諸聖人の日」、慣用句で使われることが多いようです (たとえば、**kautta aikain**「時代を通じて、歴史を通じて」)。

● フィンランド語理解のための訳例

「フィンランドにおける諸言語 | 時代を通じた」

◎ 意訳

「時代を通じたフィンランドの言語」

★ 補足

① フィンランドの先史時代に関する語彙

esi-historia「先史」

jää-kausi「氷河期」(～紀元前 8850)

kivi-kausi「石器時代」(紀元前 8850～紀元前 1700)

kampa-keräminen kulttuuri「櫛目文(くしめもん)土器文化」

nuora-keräminen kulttuuri「縄目文(なわめもん)土器文化」

= vasara-kirves-kulttuuri「戦斧(せんぷ)文化」

tekstiili-keräminen kulttuuri「布目文(ぬのめもん)土器文化」

keräminen「土器の、陶磁器の」

keramiikka「土器、陶磁器」

keraamikko「土器製作者、陶芸家; ~土器文化の人間」

pronssi-kausi「青銅器時代」(紀元前 1700~紀元前 500)

rauta-kausi「鉄器時代」(紀元前 500~紀元後 1200/1300)

②言語史に関する語彙

kieli-kunta「語族」(系統的に関係のある言語の「家族」)

uralilainen kieli-kunta「ウラル語族」(フィンランド語と親戚の言語が属する)

indo-eurooppalainen kieli-kunta「インド・ヨーロッパ語族」

uralilaiset kielet「ウラル語族の諸言語」(uralilainen「ウラル語族の」)

indo-eurooppalaiset kielet「インド・ヨーロッパ語族の諸言語」

kanta-kieli「祖語」

kanta-「~祖語」

kanta-urali「ウラル祖語」(ウラル諸語の理論上の祖先)

kanta-indo-eurooppa「インド・ヨーロッパ祖語」(インド・ヨーロッパ諸語の理論上の祖先)

itä-meren-suomi「バルト・フィン(諸)語」(フィンランド語ともっとも近い系統関係にある言語のグループ: suomi「フィンランド語」、viro「エストニア語」、karjala「カレリア語」、liivi「リーブ語」、vatja「ボート語」、vepsä「ベプス語」など)

kanta-suomi「フィン祖語」(itä-meren-suomi の理論上の祖先)

saame「サーミ語」(フィンランド語にとってはバルト・フィン諸語の次に近い系統関係にある言語)

kanta-saame「サーミ祖語」

murre「方言」(複数: murteet)

フィンランド語は大きく西部方言と東部方言に分けられる。

länsi-murteet「西部方言」

itä-murteet「東部方言」

③論文の要旨

氷河期が終わり現在のフィンランドに人々が到達したが、その人々の言語については何も分からない。その後の「櫛目文土器文化」についても同じことが言える。次にフィンランド南部と西部の沿岸部に広がった「縄目文土器文化」はインド・ヨーロッパ語族の北西インド・ヨーロッパ語派に結びつけられるが、これは現在のゲルマン語派やスラブ語派の祖先だと考えられる。さらに石器時代から青銅器時代へと変わろうとする時期に南東から布目文土器文化が到来するが、この文化の担い手たちが話していたのは西ウラル語系の言語である可能性がある。その後の青銅器時代には、フィンランド語の祖先であるバルト・フィン語はまだロシア北西部で話されていたと考えられる。そして鉄器時代になるとバルト・フィン語とサーミ語の祖先がフィンランドへ広がっていくことになった。ただし、現在のフィンランド語はバルト・フィン語が分岐した古西フィン語と古カレリア語が一つの「フィンランド語」として構築された結果として生まれたものであり、それは「フィンランド」という政治的単位が生まれたことによる。

【2】まずはフィンランドに現れた最初の人々の言語について

Ensimmäiset ihmiset saapuivat Suomeen etelän ja kaakon suunnilta noin 10 000 vuotta sitten, ja jo he saattoivat puhua useita eri kieliä. Levittäytyessään kohti pohjoista he kohtasivat pian Lapissa Jäämeren rannikon asukkaita, jotka olivat kulkeneet Länsi-Euroopasta pohjoiseen sulaa Norjan rannikkoa seuraten.

Ensimmäisten asuttajien kielistä emme tiedä käytännössä mitään, emme edes niiden lukumäärää tai keskinäisiä sukulaisuussuhteita.

■ 語句・文法

kaakko「南東」⇔ luode「北西」/levittäytyessään「広がるときに」e 不[内]+ 複 3 所接[時構] < levittäytyä < levittää < levitä/sula「解けた」/seuraten「沿うことにより」e 不[具] < seurata/asuttaja「居住者、入植者」< asuttaa/käytännössä「実際のところ」[内]< käytäntö < käyttää/keskinäinen「おたがいの」/sukulaisuus-suhde「系統関係」

● フィンランド語理解のための訳例

最初の人間たちはフィンランドへ到達した|南と南東の方角から|およそ1万年前に、|そして、すでに彼らは話していたかもしれない|複数の異なる言語を。北へ向けて広がるときに|彼らはまもなく出会った|ラップランドで|北極海沿岸の居住者たちと、|その彼らは移動していた|西ヨーロッパから北へ|氷河が解けたノルウェーの沿岸に沿って。

最初の居住者たちの言語について|我々は実際のところ何も知らない、|我々は知らない|それら言語の数やおたがいの系統関係さえ。

◎ 意訳

最初の人間たちは南と南東の方角から約1万年前にフィンランドへ到達したが、すでに彼らは複数の異なる言語を話していたのかもしれない。北へ向け広がる際に、彼らはまもなくラップランドで北極海沿岸の居住者たちと出会うことになったが、その居住者たちは西ヨーロッパから北へと氷の解けたノルウェー沿岸に沿って移動していた。

最初の居住者たちの言語については、我々は実際のところ何も知らないし、それらの数や、あるいは相互の系統関係についてさえ何も分かっていない。

★ 補足

フィンランド語では8つの方角を区別する。()内は形容詞の形。

北	pohjoinen	北西	luode (luoteinen)
西	länsi (läntinen)	南西	lounas (lounainen)
南	etelä (eteläinen)	南東	kaakko (kaakkoinen)
東	itä (itäinen)	北東	koillinen

【3】「櫛目文土器文化」の到来と言語

Noin 7000 vuotta sitten Suomeen ja lähialueille alkoi levittäytyä kampakeraaminen kulttuuri, joka luultavasti toi mukanaan uuden kielen. [...]

Aikaisemmin tyypilliseen kampakeramiiikkaan on haluttu yhdistää uralilaisen kielikunnan itämerensuomalainen kielihaara, mutta nykytiedon valossa rinnastus ei täsmää ajallisesti eikä alueellisesti: uralilainen kieli on levinnyt Itämeren alueelle vasta paljon kampakeramiiikkaa myöhemmin, eikä uralilaisten kielten alueen tiedetä milloinkaan ulottuneen Liettuaan saakka. Lappikin uralilaistui vasta noin 2000 vuotta sitten, ja ensimmäiset (itämeren)suomalaiset ehtivät sinne vasta 1000 vuotta sitten, joten mitään todellista yhteyttä tyypillisen kampakeramiiikan levinneisyyteen ei itämerensuomella ole.

■ 語句・文法

kampa-keräminen kulttuuri「櫛目文土器文化」／luultavasti「おそらく」< luultava 受現分 < luulla／on haluttu「望まれていた」受完 < haluta／yhdistää「結びつける」／kieli-kunta「語族」／kieli-haara「語派」(「語派」は「語族」の下位範疇で、語族から分岐したグループのことを意味する)／rinnastus「並べること」< rinnastaa < rinta／täsmätä「合致する」／eikä uralilaisten kielten alueen tiedetä ulottuneen「そしてウラル諸語の地域が到達したことは知られていない」[分構](ei tiedetä 受現否 < tietää、uralilaisten kielten[複属]< uralilainen kieli、ulottuneen 能過分[属]< ulottua)／milloinkaan「けっして(～ない)」(mikään + -lloin)／uralilaistua「ウラル(語)化する」／ehtii「到達する」／mitään todellista yhteyttä... ei itä-meren-suomella ole「何の実際の関係も、バルト・フィン語はもたない」／tyypillisen kampa-keramiikan levinneisyyteen「典型的な櫛目文土器<文化>の広がりに対して」(levinneisyyteen[入]< levinneisyys < levinnyt 能過分 < levitä)

● フィンランド語理解のための訳例

約 7000 年前、フィンランドと近隣地域へ | 広がり始めた | 櫛目文土器文化が、| それはおそらく新しい言語をもたらした。[...]

以前は典型的な櫛目文土器文化に対して望まれていた | [結びつけることが | ウラル語族バルト・フィン語派を]、| しかし、現在の知見に照らせば < 櫛目文土器文化とバルト・フィン語を > 並べて考えることは合致しない | 時代的にも地域的にも: ウラル系言語は広がった | バルト地方へ | 櫛目文土器<文化>よりずっと後になって、| そしてウラル諸語の地域は知られていない | いかなるときにも到達したことは | リトアニアまで。ラップランドもウラル語化した | 約 2 千年前になってやっと、| そして最初の(バルト・)フィン語系の人々はそこへ到達した | やっと千年前になって、| そのためにいかなる実際の結びつきも | 典型的な櫛目文土器の広がりに対して | バルト・フィン語はもたない。

◎ 意訳

約 7 千年前にフィンランドと近隣地域へ櫛目文土器文化が広がり始めたが、それはおそらく新しい言語をもたらしたのだろう。[...]

以前は典型的な櫛目文土器文化に対してウラル語族バルト・フィン語派を結びつけたいとされていたが、現在の知見に照らせば両者を並べることは時間的にも地理的にも合致しない：ウラル系言語がバルト地方へ到達したのは櫛目文土器文化よりもはるかに後のことであり、またウラル諸語の地域がいかなる時代にもリトアニアまで到達したということは知られていない。ラップランドがウラル語化したのも約 2 千年前になってからのことであり、最初の(バルト・)フィン語系の人々がそこへ到達したのも千年前になってからのことである。そのため、典型的な櫛目文土器の広がりとのつながりというものをバルト・フィン語はもたない。

★補足

フィンランド北部のラップランドがウラル語化したのがせいぜい 2000 年前、バルト・フィン語がそこへ到達したのはやっと 1000 年前。したがって、7000 年前の櫛目文土器文化の広がりとはバルト・フィン語との間には関係はないということ。

【4】次は「縄目文土器文化」と言語

Noin 5000 vuotta sitten Keski-Euroopasta levisi nuorakeraaminen kulttuuri hyvin nopeasti Baltiaan ja Suomeen, ja hieman myöhemmin ilmeisesti Baltiasta Ruotsiin ja Volgan suuntaan. [...]

Nuorakeraamiseen kulttuuriin yhdistetään yleisesti luoteisindoeurooppalaisen murteen leviäminen, koska tältä kulttuurialueelta voidaan johtaa myöhemmät germaanisen, balto-slaavilaisen, kelttiläisen ja itaalisen kielihaaran kielet.

■語句・文法

nuora-keräminen kulttuuri「縄目文土器文化」／ilmeisesti「どうやら」< ilmeinen／Volga「(ロシア西部の)ボルガ地方」／luoteis-「北西の」< luoteinen < luode ⇔ kaakkoinen < kaakko／murteen「方言の」[属] < murre／johtaa「導き出す」

●フィンランド語理解のための訳例

約 5000 年前 | 中央ヨーロッパから広がった | 縄目文土器文化が | 急速に | バルト地方とフィンランドへ、 | そして、少し後で | どうやらバルト地方からスウェーデンとボルガの方向へと。 [...]

[縄目文土器文化には結びつけられる | 一般的に北西インド・ヨーロッパ方言の拡大が]、 | なぜなら、 [この文化圏から導き出すことができるから | 後のゲルマン語派、バルト・スラブ語派、ケルト語派、そしてイタリック語派の諸言語を]。

◎意訳

約 5000 年前には、中央ヨーロッパからバルト地方やフィンランドへ縄目文土器文化が急速に広がり、さらに若干遅れてどうやらバルト地方からスウェーデンやボルガの方向へと拡大していった。 [...]

縄目文土器文化には、一般的に北西インド・ヨーロッパ方言の拡大が結びつけられている。なぜ

なら、この文化圏から後のゲルマン語派、バルト・スラブ語派、ケルト語派、そしてイタリック語派の諸言語が派生したと考えることができるからである。

【5】フィンランド南西部ではインド・ヨーロッパ語族の言語が話されていた

[...] Siksi on mahdollista, joskaan ei varmaa, että Suomen lounaisrannikolla puhuttiin kivikauden lopulla pidemmän aikaa indoeurooppalaista kieltä (kantaindоеuroopan luoteismurretta).

Todistusaineisto nuorakeraamikkojen kielestä koostuu luoteisindoeurooppalaisina pidetyistä lainasanoista, joiden levinneisyys rajoittuu itämerensuomeen ja mahdollisesti saameen. [...] Myös nimi Suomi voi juontua luoteisindoeuroopan 'ihmistä, kuolevaista' merkitsevistä sanasta.¹⁴

14. Kallio, Petri 1998: Suomi(ttavia etymologioita). – Virittäjä 4 / 1998, Helsinki.
http://www.kotikielenseura.fi/virittaja/hakemistot/jutut/1998_613.pdf

■ 語句・文法

joskaan「～だとしても」(肯定文では joskin) / pidemmän aikaa「かなり長い間」(pidemmän [属対] < pitempi 比 < pitkä) / luoteis-murretta「北西方言を」[分] < -murre / todistus「証明」 < todistaa / aineisto「材料」 < aine / koostua「構成される」(+ [出]) / nuora-keramikkojen「縄目文土器文化の人々の」[複属] < -keramikko / luoteis-indo-eurooppalaisina pidetyistä lainasanoista「北西インド・ヨーロッパ語とみなされる借用語から」(pidetyistä 受過分 [複出] < pitää「みなす」) / levinneisyys「広がり、分布」 < levinnyt < levitä / rajoittua「～に限られる」 < rajoittaa < raja / juontua「～に起源がある、～から導かれる」 / kuolevainen「死すべき」 < kuolla

● フィンランド語理解のための訳例

[...] そのためありうる | 確実ではないにしても | フィンランドの南西沿岸部で話されていたということが | 石器時代の終わりに | より長い間 | インド・ヨーロッパ語系の言語が (インド・ヨーロッパ祖語の北西方言が)。

[証明材料は | 縄目文土器文化の人々の言語 < の存在 > についての] | 構成される | [北西インド・ヨーロッパ語 < 起源 > とみなされる借用語によって、 | それらの分布は限られている | バルト・フィン語とおそらくサーミ語だけに]。[...] また「Suomi」という名前も由来する可能性がある | 北西インド・ヨーロッパ語の「人間、死すべき者」を意味する単語に。

◎ 意訳

[...] そのため、フィンランド南西沿岸部では石器時代の終わりのかなり長い間、インド・ヨーロッパ系の言語 (インド・ヨーロッパ祖語の北西方言) が話されていたということは、確実ではないにしてもありうることである。

縄目文土器文化を担う人々の言語の存在について証明する材料は、その分布がバルト・フィン語と、おそらくサーミ語だけに限られているような北西インド・ヨーロッパ語起源とみなされる借用語か

ら構成されている。[...]また Suomi という名称も北西インド・ヨーロッパ語の「人間、死すべき者」を意味する単語にさかのぼる可能性がある。

★補足

①内容の補足

縄目文土器文化はフィンランドのおもに南部と西部の沿岸部に広がったが、その南部や西部の沿岸部では石器時代の終わりのかなり長い間、インド・ヨーロッパ系の言語が話されていた可能性がある。これを論文では「北西インド・ヨーロッパ語」と表現しているが、これはインド・ヨーロッパ語族のうちゲルマン語派(ドイツ語、オランダ語、英語、デンマーク語、スウェーデン語、ノルウェー語、アイスランド語など)やバルト語派(ラトビア語、リトアニア語)、あるいはスラブ語派(ロシア語、ウクライナ語、ベラルーシ語、チェコ語、スロバキア語、ポーランド語、ブルガリア語、セルビア語、クロアチア語など)やケルト語派(アイルランド語、ウェールズ語、ゲール語など)、さらにイタリック語派(ラテン語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、ルーマニア語など)の祖先にあたる。

②Suomi の語源について

フィンランド語の suomi の語源については、上記のようにインド・ヨーロッパ語族の言語における「人間」を表す語を借用したものだという説があるが、その場合にはラテン語の homō と同じ起源だということになる。また、suomi はバルト系言語で「土地」を表す語からの借用だという説もある。いずれにしても、いまだに Suomi は「湖の国」という意味だと説明している書籍やホームページなどに出会うのが不思議でならない。

【6】スウェーデン語の親戚の方が歴史は古い

Ruotsin kielen sukulaiskieltä puhuttiin siis Suomessa luultavasti ennen suomen kielen varhaismuotoja.

■語句・文法

varhais-「初期の」 < varhainen / muotoja 「形態」 [複分] < muoto

●フィンランド語理解のための訳例

スウェーデン語と系統関係にある言語は話されていた | つまりフィンランドにおいて | おそらく | フィンランド語の初期形態よりも以前に。

◎意訳

つまりフィンランドにおいては、スウェーデン語と系統関係にある言語がフィンランド語の初期の形態よりも以前に話されていたということになる。

★補足

フィンランド語の初期形態というのは、この後の文章の中で出てくるウラル語族バルト・フィン祖語のことをさすのだろう。

【7】そして「布目文土器文化」の到来。

Kivikauden muuttuessa pronssikaudeksi suunnilleen 4000 vuotta sitten levisi Suomeen kaakosta tekstiilikeraaminen kulttuuri, joka poikkesi suuresti sisämaan kivikautisesta kulttuurista. Onkin esitetty, että tähän vaiheeseen liittyy merkittävä uusi muuttoaalto.²⁵

Historiallisen kielitieteen perustelluimman näkemyksen mukaan kantaurali alkoi levitä Volgan mutkan tienoilta kohti länttä juuri näihin aikoihin,^{11, 15} mutta itämerensuomalainen ja saamelainen kielihaara eivät kuitenkaan syntyneet saati levinneet Suomeen asti näin nopeasti vaan vasta rautakaudelle tultaessa (ks. myöhemmät vaiheet). Niinpä tähän vaiheeseen täytyy liittyä jokin muu kieli.

25. Lavento, Mika 2003: Viipurin läänin pronssikausi ja varhaismetallikausi. Karjalan synty, s. 245–290. Viipurin läänin historia I. (Toim. Matti Saarnisto.) Joensuu: Karjalaisen kulttuurin edistämissektori.
11. Häkkinen, Jaakko 2009: Kantauralin ajoitus ja paikannus: perustelut puntarissa. – Suomalais-Ugrilaisen Seuran Aikakauskirja 92, s. 9–56. <http://www.sgr.fi/susa/92/hakkinen.pdf>
15. Kallio, Petri 2006: Suomen kantakielten absoluuttista kronologiaa. – Virittäjä 1 / 2006, s. 2–25. http://www.kotikielenseura.fi/virittaja/hakemistot/jutut/2006_2.pdf

■ 語句・文法

muuttuessa「変わる際に」e 不[内] [時構] < muuttua / tekstiili-keräminen kulttuuri「布目文土器文化」 / poiketa「異なる」(+ [出]) / on esitetty「提示されている」受完 < esittää / merkittävä「著しい、顕著な」受現分 < merkitä / muutto-aalto「移住の波」(muutto < muuttaa) / perustelluimman「もっともよく根拠づけられた」[属] < perustelluin 最 < perusteltu 受過分 < perustella / mutka「湾曲」(Volgan mutka は Volga 川と Kama 川の合流する辺り) / länttä「西」[分] < länsi / saati「まして」 / tultaessa「来るときに」受 e 不[内] [時相] < tulla / ks. = katso「参照」 / myöhemmät「後の」[複主対] < myöhempi 比 < myöhä

● フィンランド語理解のための訳例

石器時代が青銅器時代が変わろうとするとき | おおよそ 4 千年前に | 広がった | フィンランドへ | 南東から布目文土器文化が、 | それは大きく異なっていた | 内陸の石器時代の文化とは。提示されてきている | この段階に結びつくことが | 著しい新しい移住の波が。

歴史言語学のもっともしっかりと根拠づけられた見方によれば | [ウラル祖語は広がり始めた | ボルガ川が湾曲する辺りから | 西へ向かって | まさにこの時代に]、 | しかし、[バルト・フィン語派やサーミ語派はそれでも生まれていなかった | ましてや広がってはいなかった | フィンランドにまで | このように急速には] | そうではなく、やっとならば鉄器時代に到達したときに <広がった> (後の段階を参照)。そうであれば、この段階には結びつくはずだ | <バルト・フィン語やサーミ語ではないような> 何か別の言語が。

◎意訳

約 4 千年前に石器時代が青銅器時代に変わろうとする頃、フィンランドへは南東から布目文土器文化が広がったが、これは内陸部の石器時代の文化とは大きく異なるものだった。この段階には顕著な新しい移住の波が結びつくであろうという考えが、実際に提示されている。

歴史言語学においてももっともしっかりと根拠づけられた見方によれば、ウラル祖語はボルガ川が湾曲するあたりから西へ向けてちょうどこのころに広がり始めた。しかしながら、バルト・フィン語派やサーミ語派はまだ生まれていなかったし、ましてこれほど急速にフィンランドへ広がることはなく、それは鉄器時代になってからのことであった（後の段階を参照）。そうであれば、この段階には何か別の言語が結びつくはずである。

【8】布目文土器文化はウラル語系言語と結びつく可能性が

Pauli Rahkonen yhdistääkin tekstiilikeramiikkaan länsiuralilaisen kielen leviämisen; sen jälkeläiskieliä olisivat saamen ja itämerensuomen lisäksi merja ja x-kieli(haara), joka olisi levinnyt Suomeen saakka ilmeisesti jo ennen saamea ja itämerensuomea, ehkä suunnilleen 4000–3000 vuotta sitten.³¹

31. Rahkonen, Pauli 2013: Suomen etymologisesti läpinäkymätöntä vesistönimistöä. – Virittäjä 1/2013. <http://ojs.tsv.fi/index.php/virittaja/article/view/7843/6016>

■語句・文法

leviämisen「広がり」を動名[属対] < levitä / jälkeläis-「後継者(の)」 < jälkeläinen / merja「メルヤ語」(ウラル語族フィン・ウゴル語派の言語だが、すでに消滅している) / x-kieli「x 言語」(正体不明の言語) / olisi levinnyt「広がっていたのだろう」[条] 完単 3 < levitä

●フィンランド語理解のための訳例

Pauli Rahkonen は結びつけている | 布目文土器 <文化> に対して | 西ウラル語系の言語の広がりを; その後継となる言語がサーミ語やバルト・フィン語に加え | メルヤ語や x 言語(派)であろう、| それは広がっていたのだろう | フィンランドにまで | どうやら | すでにサーミ語やバルト・フィン語よりも前に、| おそらく約 4 千年から 3 千年前に。

◎意訳

Pauli Rahkonen は布目文土器文化に西ウラル語系言語の拡大を結びつけている; その後継となる言語がサーミ語やバルト・フィン語に加えメルヤ語や x 言語(派)なのだろうが、その x 言語(派)はどうやらサーミ語やバルト・フィン語よりも以前の、おそらく約 4 千年から 3 千年前にはフィンランドへまで広がっていたのであろう。

【9】スカンジナビア青銅器文化の到来

Suomen läntiselle ja eteläiselle rannikkovyöhykkeelle levisi pronssikauden keskivaiheilla, noin 3500 vuotta sitten, skandinaavinen pronssikulttuuri.

Kulttuurikuva muuttui jälleen monella tasolla, joten uutta väestöä on muuttanut Suomen ja Viron rannikoille. [...]

[...]

Tähän aikaan itämerensuomea (varhaiskantasuomi) näyttäisi vielä puhutun Inkerinmaan ympäristössä ja saamea (varhaiskantsaame) sen pohjoispuolella, Kaakkois-Suomessa ja/tai Karjalassa.

■ 語句・文法

vyöhyke「地帯、ゾーン」／näyttäisi puhutun「話されていたようだ」[分構] (näyttäisi[条] 現単 3 < näyttää, puhutun 受過分[属] < puhua)／Inkerin-maa「イングリシア地方(歴史的にバルト・フィン語系の人々が居住してきたロシア北西部の地域)」

● フィンランド語理解のための訳例

フィンランドの西部と南部の沿岸地域へ広がった|青銅器時代の中期に、|約 3500 年前に、|スカンジナビア青銅器文化が。文化的景観は変化した|再び多くのレベルで、|そのため新たな人口集団が移動したことになる|フィンランドとエストニアの沿岸部へ。[...]

[...]

この時期にバルト・フィン語(初期フィン祖語)はまだ話されていたようだ|イングリシア地方の周辺で|そして、サーミ語(初期サーミ祖語)はその北側で|南東フィンランドと/あるいはカレリアにおいて話されていたようだ。

◎ 意識

フィンランド西部および南部の沿岸地域へは青銅器時代の中期、約 3 千 5 百年前にスカンジナビア青銅器文化が広がった。文化景観は多くのレベルにおいてふたたび変化したが、したがって新しい集団がフィンランドとエストニアの沿岸部へ移住したということになるだろう。[...]

[...]

この時代にバルト・フィン語(初期フィン祖語)はまだイングリシア地方の周辺で話されていたようであり、サーミ語はその北側、つまり南東フィンランドと/またはカレリアにおいて話されていたようだ。

★ 補足

後出【14】のテキストに出てくるように、kanta-suomi「フィン祖語」は大きく varhais-kanta-suomi「初期フィン祖語」、keski-kanta-suomi「中期フィン祖語」、myöhäis-kanta-suomi「後期フィン祖語」の三つの時期に分ける考え方がある。

【10】鉄器時代初期のゲルマン系の人々の影響

Suoraa jatkoa pronssikautiselle läntiselle vaikutukselle on varhaisen rautakauden (alkoi noin 500 eKr.) kantagermaaninen vaikutus, joka näkyy lainasanojen lisäksi myös läntisen Suomen paikannimistössä. Paikannimien perusteella tiedetään, että germaanit kohtasivat tähän aikaan Länsi-Suomessa sekä itämerensuomalaisia että saamelaisia.

■ 語句・文法

jatko「続き」< jatkaa/eKr. = ennen Kristusta「紀元前」⇔ jKr. = jälkeen Kristuksen「紀元後」/
kanta-germaaninen「ゲルマン祖語の」/nimistö「名称(全体)」< nimi/kohtasivat「出会った」過
複 3 < kohdata

● フィンランド語理解のための訳例

直接的な続きは|青銅器時代の西側の影響への|初期の鉄器時代(紀元前約 500 年に始まった)
のゲルマン祖語の影響である、|それは見て取れる|借用語に加え|また西フィンランドの地名の中に。
地名にもとづきわかる|ゲルマン系の人々が出会っていたことが|この時期に|西フィンランドにおい
て|バルト・フィン人たちと|そしてサーミ人たちと。

◎ 意訳

青銅器時代の西側からの影響に続くことになったのが、紀元前 500 年ころに始まった鉄器時代
初期のゲルマン祖語の影響である。その影響はフィンランド語やサーミ語における借用語に加え、フ
ィンランド西部の地名の中にも見て取ることができる。地名にもとづけば、ゲルマン系の人々がこの
時期にフィンランド西部において、バルト・フィン系の人々やサーミ人たちと出会っていたということが
わかる。

★ 補足

青銅器時代に続く鉄器時代の初期にはゲルマン祖語の人々の影響が続き、それはフィンランド語
の借用語やフィンランド西部の地名により明らかになっている。ゲルマン系の人々はこの頃以降、お
もにフィンランド南西部を中心にバルト・フィン語系やサーミ語系の人々と出会っていたのではない
かとのことである。

【11】青銅器時代から鉄器時代へ

Pronssikaudelta rautakautteen siirryttäessä (noin 500 eKr.) itämerensuomi ja saame olivat jo alkaneet levitä aikaisempien kielten kustannuksella. Itämerensuomi oli levinnyt Lounais-Suomeen Virosta, kun taas saame oli levinnyt Etelä-Suomeen Karjalasta. Vetäytyvinä kielinä olivat tässä vaiheessa ainakin lännessä germaaninen kieli ja idässä uralilainen x-kieli. Asutuksen ollessa hyvin harvaa on paikka paikoin luultavasti puhuttu edelleen myös kampakeraamikkojen ja/tai nuorakeraamikkojen kieltä, ja pohjoisempaan jopa alkuausuttajien kieltä.

■ 語句・文法

siirryttäessä「移る際に」受 e 不 [内] [時構] < siirtyä / aikaisempien「以前の」[複属] < aikaisempi 比 < aikainen / kustannuksella「～を犠牲にして」[接] < kustannus「費用」 < kustantaa / lounais-「南西の」 < lounainen < lounas「南西」⇔ koillinen「北東(の)」 / taas「一方で、それに対して」 / vetäytyvinä kielinä「引き下がるような諸言語として」(vetäytyvinä 能現分 [複様] < vetäytyä < vetää) / asutuksen ollessa harvaa「居住がまばらだったときに」[時構] (ollessa e 不 [内] < olla) / paikka paikoin「ところどころで」 / pohjoisempana「より北で」[様] < pohjoisempi 比 < pohjoinen

● フィンランド語理解のための訳例

青銅器時代から鉄器時代に移るころ(およそ紀元前 500 年)、バルト・フィン語とサーミ語はすでに広がり始めていた | それ以前の諸言語の犠牲の上に。バルト・フィン語は広がっていた | 南西フィンランドへエストニアから、| 一方でサーミ語は広がっていた | 南フィンランドへカレリアから。後退する言語となっていたのは | この段階で | 少なくとも西ではゲルマン系の言語であり | そして東ではウラル系の x 言語であった。居住が非常にまばらだったときに | ところどころでは | おそらく話されていた | 依然として櫛目文土器<文化>の人々と / または縄目文土器<文化>の人々の言語も、| そしてより北では最初の居住者たちの言語でさえ。

◎ 意訳

青銅器時代から鉄器時代に移るころ(紀元前約 500 年)、それ以前の言語の犠牲の上にバルト・フィン語とサーミ語はすでに拡大を始めていた。バルト・フィン語はエストニアからフィンランド南西部へ広がっており、一方でサーミ語はカレリアからフィンランド南部へと広がっていた。この段階で、それら言語の前から後退することになったのは、少なくとも西ではゲルマン系の言語であり、東ではウラル系の x 言語であった。居住が非常にまばらだったこともあり、場所によっては依然として櫛目文土器文化を担う人々の言語と / または縄目文土器文化を担う人々の言語がおそらく話されていたのだろうし、より北部に行けば最初の居住者たちの言語さえ話されていたのだろう。

【12】鉄器時代は言語史における大きな転換点

Rautakauden alkua voidaan pitää Suomen kielellisen historian murroskohtana: tällöin alueelle ilmestyivät ainoat maassamme nykyaikaan asti säilyneet kielihaarat: itämerensuomi ja saame. Ne kehittyivät valtakieliksi ja alkoivat levittäytyä syrjäyttäen tieltään varhaisempia kieliä (alkuasuttajien kielet, kampakeraamikkojen kieli, nuorakeraamikkojen luoteisindoeurooppalainen kieli, tekstiilikeraamikkojen länsiuralilainen x-kieli ja rannikon germaaninen kieli).

■ 語句・文法

murros-kohta「転換点、区切り点」 / säilyneet「(消えずに、傷つかずに)残った、保存された」 能過分 [複主] < säilyä / syrjäyttäen「どけながら、とって代わりながら」e 不 [具] < syrjäyttää /

varhaisempia「より早い、より前の」[複分] < varhaisempi 比 < varhainen

●フィンランド語理解のための訳例

鉄器時代の始まりをみなすことができる|フィンランドにおける言語史の転換点だと|:この時期に<フィンランドの>地域へ現れた|我が国で現在まで生き残っているただ二つの言語派が:|つまり、バルト・フィン語とサーミ語が<現れた>。それらは支配的言語となった|そして広がり始めた|押しのけながら|自分たちの前から|それ以前までの諸言語を(最初の居住者たちの諸言語、櫛目文土器の人々の言語、縄目文土器の人々の北西インド・ヨーロッパ系の言語、布目文土器の人々の西ウラル系の x 言語、そして沿岸部のゲルマン系言語)。

◎意識

鉄器時代の始まりをフィンランドにおける言語史の転換点とみなすことができる:このときになって我々の国において現在まで存在し続けるただ二つの語派、つまりバルト・フィン語とサーミ語が、この地域へ現れたのである。それらは支配的言語へと成長し、それ以前に存在していた諸言語(最初の居住者たちの諸言語、櫛目文土器を担う人々の言語、縄目文土器を担う人々の北西インド・ヨーロッパ系の言語、布目文土器文化を担う人々の西ウラル系の x 言語、そして沿岸部のゲルマン系言語)を自らの前から排除しながら拡大し始めたのである。

【13】サーミ語の拡大

Saame oli tiettävästi viimeinen suomen kielen valta-asemaa edeltänyt kieli, joka levisi Suomeen. Suomalaiset ovat lainanneet saamesta sekä sanoja että paikannimiä; niitä löytyy myös aivan etelästä.^{1, 4, 5} Voidsinkin sanoa, että saamea on puhuttu koko Suomessa, ehkä pientä lounaisrannikon kaistaletta lukuun ottamatta – siellä on asunut keskikantasuomalaisia jo pronssi- ja rautakausten taitteessa.

1. Aikio, Ante 2003: Suomen saamelaisperäisistä paikannimistä. – Virittäjä 107, s. 99–106. Helsinki: Kotikielen seura. http://www.kotikielenseura.fi/virittaja/hakemistot/jutut/2003_99.pdf
4. Aikio, Ante 2007: The Study of Saami Substrate Toponyms in Finland. – Onomastica Uralica 4, s. 159–197. Debrecen/Helsinki: Debreceni Egyetem, Magyar Nyelvtudományi Intézet / Kotimaisten kielten tutkimuskeskus. <http://mnytud.arts.klte.hu/onomural/kotetek/ou4/08aikio.pdf>
5. Aikio, Ante 2009: The Saami Loanwords in Finnish and Karelian. Väitöskirja, Oulun yliopisto. <http://cc.oulu.fi/~anaikio/slw.pdf>

■語句・文法

tiettävästi「知られているように、おそらく」/edeltänyt「先行したような」能過分 < edeltää < esi/
kaistale「細長いもの、細長い土地」/lukuun ottamatta「除いて、数に入れずに」(lukuun[入]< luku, ottamatta MA 不[欠]< ottaa) /taitteessa「変わり目に」[内] < taite < taittaa

●フィンランド語理解のための訳例

サーミ語は知られているように最後の|フィンランド語の支配的地位に先行した言語である、|それはフィンランドに広がった。フィンランド人たちはサーミ語から借用してきた|語彙と地名の両方を|;それらはまたごく南部でも見つかる。言うことができる、|サーミ語はフィンランド全土で話されていたと、|おそらく小さな南西沿岸部の細長い地域を除いて|—そこには住んでいた|中期フィン祖語を話す人々が|すでに青銅器時代と鉄器時代の変わり目には。

◎意訳

知られているようにサーミ語は、フィンランド語がフィンランドにおいて支配的地域を獲得する前にフィンランドへ拡大した最後の言語である。フィンランド人たちはサーミ語から語彙と地名の両方を借用してきた:それら地名はごく南部にも存在する。おそらく南西沿岸部のいくつかの小さな細長い地域を除けば、サーミ語はフィンランド全域で話されていたと言えるだろう。南西沿岸部の細長い地域においては、すでに青銅器時代と鉄器時代の変わり目には中期フィン祖語の話し手たちが居住していた。

【14】フィンランド語とバルト・フィン諸語は切り離せない

Suomen kieltä ei voi käsitellä irrallaan itämerensuomalaisesta kielihaarasta eikä itämerensuomalaisten kielten yhteisestä kantakielestä kantasuomesta. Kantasuomi on mielekästä jakaa kolmeen vaiheeseen: varhais-, keski- ja myöhäiskantasuomeen. Aiemmin varhaiskantasuomi-nimitystä käytettiin itämerensuomen ja saamen oletetusta yhteisestä kantakielestä, mutta nykyään nimitystä käytetään loogisesti siitä kielentasosta, josta itämerensuomen erilliskehitys alkaa.

■語句・文法

irrallaan「～とは別に」⇒ irralleen / mielekäs「合理的な」 / aiemmin「以前は」 / oletetusta yhteisestä kanta-kielestä「推測された共通の祖語について」(oletetusta 受過分 [出] < olettaa < olla) / loogisesti「論理的に、理屈にかなうように」 < looginen / erillis-kehitys「分化、個別の発展」(erillis- < erillinen「別々の、個別の」)

●フィンランド語理解のための訳例

フィンランド語を扱うことはできない|バルト・フィン語派と別には|そしてバルト・フィン諸語の共通の祖語であるフィン祖語とも<別に扱えない>。フィン祖語は|合理的である|3つの段階へ分けることが:<つまり>初期フィン祖語、中期フィン祖語、そして後期フィン祖語へと。以前は初期フィン祖語という名称は使われていた|バルト・フィン語とサーミ語の推定される共通の祖語について、|しかし現在では|その名称は使われている|論理的に|[言語のレベルについて|そこからバルト・フィン語の分化が始まるような]。

◎意訳

フィンランド語をバルト・フィン語派と切り離して扱うことはできないし、またバルト・フィン諸語の共

通の祖語であるフィン祖語とも切り離して扱うことはできない。フィン祖語は 3 つの段階へ区分することが合理的である：つまり初期フィン祖語、中期フィン祖語、後期フィン祖語へと時代区分できる。初期フィン祖語という名称は、以前はバルト・フィン語とサーミ語の推定上の共通の祖語をさすものとして使われていたが、現在では論理的な整合性をもつよう、そこからバルト・フィン語の分化が始まるような言語レベル、つまりバルト・フィン諸語の祖語をさすものとして使われている。

【15】フィンランド語拡大の開始

Edellä on jo mainittu, että keskikantasuomalaisia on asunut Lounais-Suomen rannikolla jo rautakauden alussa (500 eKr.). Vaikka kantasuomalainen kieli päivittyikin Virosta tämän jälkeen vielä noin vuosituhaten ajan ennen kuin voidaan puhua eriytyneestä muinaislänsisuomesta (n. 500 jKr.), osoittavat kantagermaanista kantasuomeen lainatut paikannimet, että länsisuomalaiset ovat Suomen alueen keskikantasuomalaisten kielellisiä jälkeläisiä.

[...]

On siis vankkaa näyttöä siitä, että suomen kielen jatkuvuus Lounais-Suomessa ulottuu ainakin rautakauden alkuun (500 eKr. saakka). [...]

■ 語句・文法

päivittyä「更新される、アップデートされる」<päivittää<päivä/eriytyneestä「枝分かれしたような」能過分[出]<eriytyä<eri/n.=noin「約、およそ」/lainatut「借用された」受過分[複主]<lainata/vankka「確固たる」/näyttö「証拠」<näyttää

● フィンランド語理解のための訳例

[すでに前述した、|中期フィン祖語を話す人々は住んでいたと|南西フィンランドの沿岸部に|すでに鉄器時代の初め(紀元前 500 年)には]。[フィン祖語はエストニアから更新されていくことになるのだが|この後もまだ約 1000 年の間は] | [話せるようになるまでに|<フィン祖語から>枝分かれして生まれた古西フィン語(約紀元後 500 年)<の存在>について] | <以上のような> [示している |ゲルマン祖語からフィン祖語に借用された地名<の存在>は、|西フィンランド人たちがフィンランド地域における中期フィン祖語話者たちの言語的後継者であることを]。

つまり強固な証拠がある、|[フィンランド語の継続性が|南西フィンランドにおける|さかのぼるといふことについて|少なくとも鉄器時代の初めにまで(およそ紀元後 500 年にまで)]。

◎ 意識

前述のとおり中期フィン祖語を話す人々はすでに鉄器時代の初め(紀元前500年)には南西フィンランドの沿岸部に居住していた。フィン祖語から分岐した古西フィン語(紀元後約500年)というものの存在について話すことができるまでのさらに千年間にわたって、この後もまだフィン祖語を話す人々の言語はエストニアから更新されていくことになったが、ゲルマン祖語からフィン祖語へ借用された地名は、フィンランド語西部方言を話す西フィンランド人たちがフィンランド地域における中期フィン祖語話者たちの言語的後継者であることを示している。

つまり南西フィンランドにおけるフィンランド語の継続性は少なくとも鉄器時代の初め（紀元前 500 年）にまでさかのぼるということについては、確固たる証拠があるのである。

★補足

「後期フィン祖語」はさらに etelä-kanta-suomi「南部フィン祖語」、pohjois-kanta-suomi「北部フィン祖語」、itä-kanta-suomi「東部フィン祖語」に分かれたという考え方があるが、etelä-kanta-suomiからはさらに muinais-viro「古エストニア語」が、pohjois-kanta-suomiからはさらに muinais-länsi-suomi「古西フィン語」が、そして itä-kanta-suomiからはさらに muinais-karjala「古カレリア語」が派生したと考えられているようだ。

【16】現在のフィンランド語の出発点は二つある

Tästä vaiheesta eteenpäin suomen kieli onkin kaksilähtöinen: länsimurteet ovat muinaislänsisuomen [...] jatkajia, kun taas itämurteet ovat muinaiskarjalan jatkajia.

Muinaiskarjalan puhuma-alue on jo 700 vuotta sitten jakautunut kahden valtakunnan alueelle, minkä seurauksena sen jatkajamurteet lasketaan eri kieliksi: osa kuuluu suomen kielen piiriin, osa karjalan kielen piiriin, ja lisäksi inkeroinen lasketaan omaksi kielekseen.

■ 語句・文法

kaksi-lähtöinen「二つの出発点をもつような」/jatkaja「後継者」<jatkaa/kun taas「一方では」/jakautua「分かれる」<jakaa/valta-kunta「国家」/minkä seurauksena「その結果として」(minkä [属]<[関代]mikä, seurauksena [様]<seuraus < seurata) /lasketaan「数えられる、(含まれると)みなされる」受現 < laskea/inkeroinen「インケリ語(イングリシア語、イジョール語)」(バルト・フィン諸語のひとつ) /kielekseen「言語だと」[変]+ 単 3 所接 < kieli

● フィンランド語理解のための訳例

この段階以降、フィンランド語は二つの出発点(起源)をもつことになる|:〈つまり、フィンランド語の〉西部方言は古西フィン語の[...]後継者であり、|一方で東部方言は古カレリア語の後継者なのである。

古カレリア語の話されていた地域は|すでに 700 年前には分かれていた|二つの国家の地域へと、|その結果として|その後継者となる諸方言はみなされる|異なる言語として:一部はフィンランド語の領域に属し、|一部はカレリア語の領域に|そして、さらにインケリ語(イングリシア語、イジョール語)はみなされる|独自の言語として。

◎ 意訳

この段階以降、フィンランド語は二つの起源をもつことになる:つまりフィンランド語の西部方言は古西フィン祖語の[...]後継者であり、一方で東部方言は古カレリア語の後継者なのである。

古カレリア語の話されていた地域は、すでに 700 年前には二つの国家(当時のスウェーデンとノブゴロド公国)が支配する地域へと分かれていたが、その結果として古カレリア語から派生した諸方

言はいくつかの異なる言語〈に属する〉と考えられている:その一部はフィンランド語に属し、そして一部はカレリア語に属するものとなっており、さらにインケリ語〈イングリア語、イジョール語〉は独自の言語とみなされるようになっている。

【17】共通の国家が二つの言語を一つにした

Vasta kun länsisuomalaisten ja itäsuomalaisten alueet jäivät saman Ruotsin valtakunnan osiksi, syntyi tilanne, joka mahdollisti näiden erilähtöisten kielimuotojen hahmottamisen ja kehittymisen saman kielen murteiksi. Ilman yhteistä valtiota sanastollista yhdentymistä tuskin olisi tapahtunut (vrt. itämurteiden ja karjalan suhde), jolloin itä- ja länsisuomi olisivat luultavasti jatkaneet kehitystään erillisiksi kieliksi.

■ 語句・文法

eri-lähtöinen「起源の異なる」/hahmottaa「理解する」< hahmo/sanastollinen「語彙に関する」< sanasto < sana/yhdentymistä「統合すること」動名[分] < yhdentyä < yhdentää < yksi/vrt. = vertaa「比較せよ」/jolloin「そのときに、その場合には」(jolloin = [関代]joka + -lloin)

● フィンランド語理解のための訳例

西フィンランド人と東フィンランド人の地域が同じスウェーデン国家の一部になってはじめて、|[生まれた|状況が、|それが可能にした|これら異なる出発点をもつ言語形態を理解することを、<それらが>発展することを|同一の言語の方言として]。共通の国家なしには|語彙の面での統合はまず起こらなかつたろう(比較せよ|東部方言とカレリア語の関係を)、|その場合には、東フィンランド語と西フィンランド語はおそらく続けていたであろう|発展を|異なる言語への。

◎ 意訳

西フィンランド人と東フィンランド人の地域が同じスウェーデン国家の一部になってはじめて、これら異なる出発点をもつ言語形態を同一言語の方言として理解することを、また同一言語の方言へと発展することを可能にする状況が生まれたのである。共通の国家なしには語彙の面での統合はまず起こらなかつたろう(フィンランド語東部方言とカレリア語の関係を比較せよ)。もし共通の国家をもつことがなければ、古カレリア語から派生した東フィンランド語と古西フィン語の後継者である西フィンランド語はおそらく異なる言語への発展を続けていたであろう。

★ 補足

バルト・フィン祖語から分岐した muinais-viro「古エストニア語」、muinais-länsi-suomi「古西フィン語」、muinais-karjala「古カレリア語」のうち、現在のフィンランド語西部方言はおもに「古西フィン語」から生まれ、一方の東方言は「古カレリア語」から派生したものである。そして、現在のフィンランドと呼ばれている地域がスウェーデンに組み込まれた際に、古西フィン語と古カレリア語の一部が一つの政治的単位を形成することになったがために、本来はかなり異なった諸言語・諸方言が一つの「フィンランド語」として認識され、構築されていったということである。

なお、「東部方言とカレリア語の関係を比較せよ」とあるのは、これらが系統的には近い関係にありながら、語彙の面ではかなり隔たっていることをさしていると思われる。

【18】「フィンランド人はどこから来たのか」という問い自体が無意味!

Esihistoriallisella ajalla Suomen alue oli jatkuvan muuttoliikkeen kohteena, eikä suomalaisten voida sanoa saapuneen alueelle jostain muualta yhtenä ryhmänä, sillä suomalaisuus käsitteenä hahmottuu näitä muuttoliikkeitä huomattavasti nuoremmaksi ilmiöksi.

■ 語句・文法

esi-historia「先史」／muutto-liike「移住、移動」／ei suomalaisten voi sanoa saapuneen「フィンランド人たちは到着したとは言えない」[分構] (saapuneen 能過分[属] < saapua)／hahmottua「形を成す、形成される」< hahmottaa < hahmo／näitä muutto-liikkeitä「これらの移住よりも」(näitä [分]< nämä, muutto-liikkeitä [分]< -liike; 比較級と結びつく比較対象は分格で表現できる)／nuoremmaksi「より若いものとして」[変]< nuorempi 比 < nuori／ilmiö「現象」

● フィンランド語理解のための訳例

先史時代にフィンランドの地域は継続的な移住の対象だった、|そして、[フィンランド人たちが到達したと言うことはできない|その地域へ|どこか他の場所から|一つの集団として]、|というのも、概念としての「フィンランド人」というものは形成されたのだから|これらの移住よりも著しく新しい現象として。

◎ 意訳

先史時代にフィンランド地域は継続的な移住の対象となっており、またフィンランド人たちがどこか他の場所から一つの集団として到着したと言うことはできない。というのも、概念としての「フィンランド人」というものは、これらの移住よりもはるかに後の現象として成立したのだからである。

★ 補足

フィンランド語もフィンランド人もどこかから来たのではなく、今のフィンランドで生まれた言語と集団を「フィンランド語」「フィンランド人」と呼んでいると考えるべきなのでしょう。このことは、もちろん「日本語」「日本人」にも当てはまるはずです。このような問題に出会うと、歴史学者である網野善彦の次のような記述に出会ったことを思い出します。

ここで再三の繰り返しになるが、あらためて強調しておきたいのは「日本人」という語は日本国の国制の下にある人間集団をさす言葉であり、この言葉の意味はそれ以上でも以下でもないということである。[...]それゆえ、日本国の成立・出現以前には、日本も日本人も存在せず、その国制の外にある人々は日本人ではない。「聖徳太子」とのちによばれた^{うまやどの み こ}厩戸王子は「倭人」であり、日本人ではないのであり、日本国成立当初、東北中北部の人々、南九州

人は日本人ではない。(82)

その日本国の成立・出現については次のように述べている。

大方の見解は七世紀末、六八九年に施工された飛鳥浄御原令^{あすかきよみはらりょう}とするが、それと異なる見解にしても七世紀半ばを遡らず、八世紀初頭を下らない。「日本」はこのときはじめて地球上に現れたのであり、それ以前には日本も日本人も存在しない[...]。(20)

このように考えるべきであるのに対して、次のようなことが平気でまかり通ることに批判が向けられている。

[...]小・中・高の教科書には国名に関わる記述はまったくなく、逆に「縄文時代の日本」「弥生時代の日本人」のように、あたかも縄文・弥生時代から日本が存在し、日本人がいたかのような記述が広く見出される。ときには、「旧石器時代に日本人がいた」などという新聞記事も現れているが、これは「神代」から日本が始まったという、戦前の教育と大同小異といわざるをえない。(21)

ここで指摘されていることはそのまま「フィンランド」にも当てはまるのだと思います。ですから、ここで取り上げた論文も、【15】まではあくまでも「現在フィンランドと呼ばれている地域」の話として理解すべきなのでしょう。

◇引用文献:

網野善彦、2008(2000)、『日本の歴史 00 「日本」とは何か』、講談社学術文庫。

◆出典

【1】～【5】、【7】～【17】: Häkkinen, Jaakko. 2014. Kielet Suomessa kautta aikain.

[https://www.academia.edu/7913635/Kielet_Suomessa_kautta_aikain]

【1】【2】1 ページ、【3】3 ページ、【4】【5】4 ページ、【7】【8】5 ページ、【9】【10】【11】6 ページ、【12】【13】【14】7 ページ、【15】8 ページ、【16】9 ページ、【17】10 ページ

【6】: Vesakoski, Outi. 2017. Uusia näkökulmia Suomen kielellisen alkuperän tutkimiseen. Enqvist, Kari, Ilari Hetemäki & Teija Tiilikainen (toim.). *Kaikki vapaudesta. Gaudeamus. 170-179.* (使用した部分は s.172).

【18】: Saarelainen, Juhana. 2016. Puhuuko Suomi suomea?. Kaartinen, Marjo, Hannu Salmi & Marja Tuominen (toim.). *Maamme. Suomalaisen kirjallisuuden seura. 415-436.* (使用した部分は s.427).

🐍 蛇足

私は 1989 年から 1992 年までフィンランドの Oulu 大学で勉強しましたが、帰国後しばらくして出版された書籍の中に次のような記述を見つけ愕然とした記憶があります(なお、下線は私が付したものです)。

フィンランド語がヨーロッパの言語とまったく違う言語(フィノ・ウゴルノ系)であることはよく知られている。それはエストニア語とハンガリー語と同系の言語であり、フィンランド人の祖先が遠い太古の昔、アジアのどこかから移動してきた民族であることを告げている。[...]

とにかく紀元前何千年か前にフィンランド人の祖先たちがバルト沿岸にやってきて、先住のこれまたどこからきたのかははっきりわかっていない(やはりウラル地方だと言われているが)ラップ人——彼らはサーメと自称する。トナカイ遊牧民族と概括してよい。[...]——を北に追い上げて今のフィンランド南部に定住したというのである。

しかしフィンランド人はこれがどうも気に入らないらしく、これまでもさまざまな説を提出している。ユダヤ人と関係があるとか、四分の三は欧州民族起源だとか、フィンランド語とヨーロッパ語とは相似性があるとか、アジアはアーリア人種の故郷だとか——なんとかヨーロッパと関係があることにしたい潜在意識があるようだ。しかし結局モンゴル、満州ツングース族に属する民族であり、直接的にはヨーロッパロシアが「故郷」らしい。しかし現在のフィンランド人は肉体的特徴としては長い歴史の過程でロシア人、スウェーデン人などとの混血もあって、ほとんど西欧化ないし東欧化している。

[...]

さて彼らの住んでいる国土、それは「スオミ」という国名であるが、その意味についてはこれまたいくつも解釈があって定説がない。「湖沼」の意だとか、魚の「うろこ」だとかいろいろ言われているが、全土に散在する無数の湖沼(約六万)との結びつきが有力である。(武田 1993: 145-146)

この書籍が出版されたのは 1993 年です。その後の 2000 年代にフィンランドにおける言語史についての考え方に大きな変化があったことにはすでに触れましたが、2000 年代より以前の記述だとしても、ここに引用した内容はいくらなんでもひどすぎます(その「ひどさ」を表現する適切な表現が見つかりません)。詳しく書く気力も起こらないのでごく簡単に。

- ・ 今後の研究で何が分かるのかは不明ですが、少なくとも現段階で「フィンランド人の祖先が遠い太古の昔、アジアのどこかから移動してきた民族であることを告げている」などという話は冗談にもなりません。それは、この書籍が刊行された 1993 年においても同じです。
- ・ サーミ人(ラップ人)は「トナカイ遊牧民族と概括してよい」とありますが、トナカイ飼育に携わるサーミ人は全体のごく一部であり、それは何も今に始まったことではありません。こういうふう to 他の民族のことを勝手に「概括」できてしまうというのは何ともうらやましい限りです。

- ・「なんとかヨーロッパと関係があることにしたい潜在意識があるようだ」とありますが、フィンランド人たちの潜在意識まで理解しているというのはすばらしいことです。一言だけ言えば、フィンランドやフィンランド人は「ヨーロッパと関係があることにしたい」のではなく「ヨーロッパ」の一部なんてすけどね。
- ・フィンランド人は「モンゴル、満州ツングース族に属する民族である」そうですが、そうであれば私などはさしずめ火星民族かもしれません。
- ・「全土に散在する無数の湖沼（約六万）との結びつきが有力」だとのことですが、suo「湖沼」はけっしてフィンランド全土に散在しているわけではありません。Suomi はもともとフィンランド南西部の地域をさす言葉でしたが、まさに南西部には suo「湖沼」が散在していません。Suomi の語源として「全土に散在する無数の湖沼（約六万）との結びつきが有力」だなどというのは、少なくとも19世紀以前の専門的知識もない時代の推測でしょう。

研究者とされる人間がこういう滅茶苦茶なことを平気で書いてしまい、しかも大手の出版社から書籍として出版されてしまうという状況には恐怖を感じます（この書籍の初版が出たのは「1893年」ではなく「1993年」です）。しかしながら、同じようなことは日々起こっており、北欧やフィンランドについて表面的・間接的な情報や知識にもとづいて専門家や研究者のように話したり書いたりする、肩書のうえでは本当に「専門家」や「研究者」である人々は少なくないのかもしれませんが。北欧やフィンランドについては適当なことを言っておいてもウソがばれる心配もそうそうないために、そういう専門家や研究者が少なくないのだらうと納得するしかないのでしょう。まあ、私もそのような人間たちの一人として、せいぜい適当なことを書いたり言ったりしていこうと思いますので、皆さんも十分に注意してください。

◇引用文献

武田龍夫. 1993. 『物語 北欧の歴史』. 中公新書.